東工大スペイン語の選択授業
―授業開始からの４年半を振り返って―

渡辺　暁
（WATANABE Akira）
ウィルカ・ドゥラン・デ・オカモト　ジャケリン
（Jackeline HUILLCA DURÁN de OKAMOTO）

１　はじめに（渡辺）

2020年４月に東京工業大学（以下東工大）のスペイン語科目が第二外国語科目となってから、2024年９月で４年半が経過した。その間のスペイン語の授業については、『ポリフォニア』に毎年授業報告を寄稿してきたが（渡辺　2021ほか）、選択の授業、特に会話についてはほとんど言及してこなかった。本稿ではこれまで会話の授業の多くを担当してきたジャケリン・オカモトと、学部生向けの中上級の授業および大学院科目の「文化演習」を担当してきた渡辺の共著という形で、これらの必修ではない、選択科目の授業について紹介・報告していきたい[1]。

東工大（2024年10月からは東京科学大学）においては、第二外国語初級の授業４単位が必修となっているが（２年次に履修する）、それ以外に水曜午後に語学の選択授業が４科目（中級・上級＋大学院生向けの文化演習[2]／会話初級・中級）用意されている。また、春休みと夏休みには集中講座も開講され、オカモトはこれまで全ての会話の集中講座を担当している。

本稿の内容は以下の通りである。まず前半でオカモトが会話の授業、特に受講生の多かった初級会話の授業を中心にその内容を紹介する[3]。後半では渡辺がこれまで担当してきた中上級の授業について、執筆時点で扱っている教材を中心に振り返り、簡単な結論を述べる。なお、わざわざ申し上げることではないが、本稿は『ポリフォニア』の同じ号に載っ

ている渡辺の「シン・外国語教育宣言」(渡辺 2025) と前後して執筆された。当然のことながらそちらと関連する部分もあるので、ご関心のある方はそちらにもぜひ目を通して頂きたい。

2　スペイン語会話クラスにおけるさまざまな工夫 (ジャケリン)

2-1　はじめに

教員として仕事を始めた頃を振り返ると、本当にいろいろな感情が入り交じっていたことを思い出します。(渡辺による注：会話の授業は第二外国語としてのスペイン語科目の発足から1年後、2021年度からはじまった。) もちろん不安や疑問も多々あり、常に山登りのような挑戦が続きましたが、時間がたち経験を積むにつれて、毎週毎週授業をする中で、少しずつ自分自身のリズムをつかんで行くことができました。

人は常に学び続けるもの、とはよく言いますが、教育について、それはより確かだと思います。哲学者であり教育学者であるジョン・デューイは「教育とは人生への準備ではなく、人生そのものである」と言ったとされますが (Saltmarsh 1996：16)、まさにこの言葉の通りで、授業をすると言うことは教えるだけでなく、自分自身をよりよい教員にする貴重な機会だと実感しています。

今回こうして自分自身の経験を共有することは、自分にとってもこれまでやってきた授業について考えるよい機会となります。最初は経験のある先生方のやり方を真似するところから始めましたが、教える仕事を始めてから数年がたった今では、毎回の学生さんとの授業は継続した学びのプロセスだと自信を持って言うことができます。そしてもちろん、今後も私は学ぶこと、改善することを続けるつもりです。

私が授業を行うにあたって重視しているのは、学生全てを巻き込むような授業です。その中にはスペイン語の基礎がまだできていない学生も、ある程度基礎を理解している学生もいます。以下では自分が目指すような授業を実現するために、どのようなやり方で授業を進めていった

のか、そしてどのような教材を用意したのかをご紹介します。

2-2　実際の授業の様子

日本におけるスペイン語の授業では、文法の説明は日本語で行われますが、会話の授業では私はスペイン語のみを話します。学生達にとって、週に一度、これまで慣れ親しんできた日本語ではなく、私が話すスペイン語を聞くことはどうしても違和感を感じるでしょう。そんな学生達がうまく授業の中に入っていけるように、自作の教材を作り、少しずつ改善しています。（渡辺による注：ジャケリン先生が担当されていた初級会話は、必修のスペイン語初級の授業と並行して受講してもらうことを前提としていたため、初級の授業の進捗状況について何らかの形で、毎週ジャケリン先生にお伝えするようにしていた。また、共通教科書『ミカサ・トゥカサ』（大橋他 2023）の刊行後は、当然ながらそちらも共有し、渡辺が授業にお邪魔して補足の文法解説をしたりもしていた。）

最初から意識していたのは、学生同士でお互いにコミュニケーションを取ってもらうことでした。お互いの名前を聞いて、スペイン語であいさつすることを勧めていました。授業内ではスペイン語のみを話し、質問やシェア、そして繰り返しなどを奨励していました。こうすることにより、発音の間違いなどを恐れることなく、より自然な形で言語を学ぶことができます。

毎週の授業では最初に、その週に扱う文法テーマを簡単に紹介するところからはじめます。資料はスペイン語と日本語の対訳で用意し、それに基づいて短い会話を繰り返し行ってもらいます。こうした会話のテーマとしては、日常生活に関連するような題材を選びます。そうした試みが学生に好評だったことは、コメントからも見て取れるかと思います。

続いて私の出身であるペルーの文化についての教材、場合によっては歌を聴いてもらいますが、こちらにも日本語訳をつけています。学生達はペルー人である私がなるべくシンプルな言葉遣いで話すのを聞き、わからない場合にはジェスチャーや写真などを使って理解してもらいま

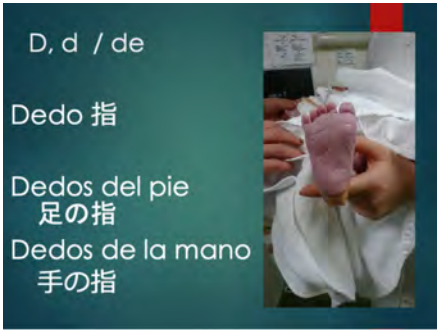
す。ペルーの歌を歌ってもらったり、その国の習慣について書かれた文を読んでもらったり、日常生活について話してもらったりしました。その週の文法のテーマによって、どんな内容にするかを考えました。学生の皆さんが協力的だったおかげで、ペルーのさまざまな良さを紹介しよう、という高いモチベーションをもって授業を進めることができました。そうした意味で、会話の授業は私にとっても学生達にとっても実りあるものでした。なお、毎回の授業終了後には学生さんたちにフィードバックをお願いしています。そのうちのいくつかを本節の最後で紹介します。

2-3　授業のために用意した教材

授業を円滑に進めるために、教科書を使うかわりに様々な教材を用意しました。ここではその一部を紹介します。

A　アルファベットを写真とともに紹介

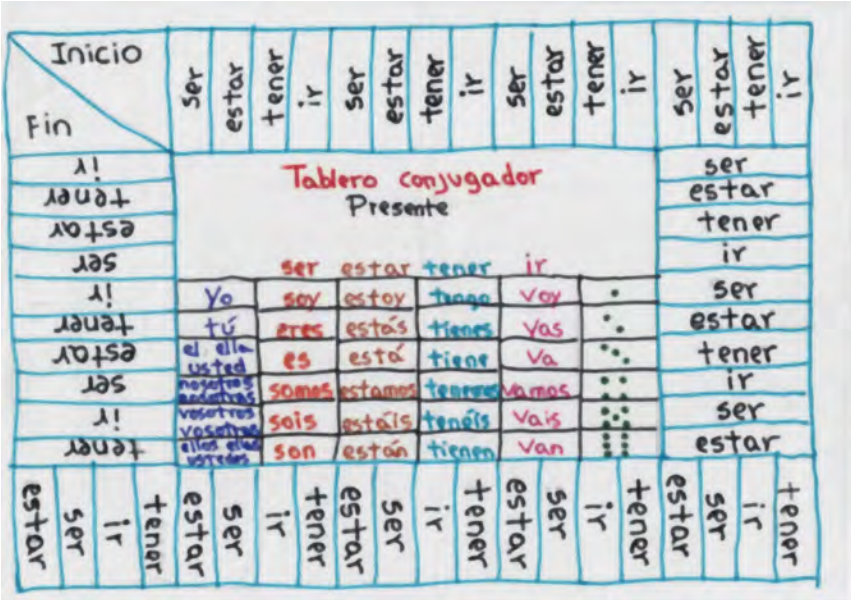
最初の授業でまだアルファベットの名前や発音も知らない学生達に対し、写真入りのスライドを使ってわかりやすく発音や基本的な単語を説明しました。



撮影：岡本年正

B　すごろく

動詞の活用を練習してもらうための工夫として、写真のようなすごろく(juego de mesa)を作りました。サイコロの目に合わせて主語を決定し、止まったマスの動詞を活用させます。それがうまく言えたらさらに1マス進み、間違えたら1歩下がるという単純な遊びですが、どの目が出てもそれに対応して動詞を活用(変形)しなければならず、スペイン語初心者にとってはとっさにそれをやるのはなかなか難しいものです。これを何度も繰り返すことで、少しずつ動詞の活用というものに慣れてもらえると思います。(渡辺追記：サイコロの目の数と活用形の数がともに六つ、ということも利用した、とても楽しく合理的な練習法に思えます。私の授業でも取り入れたら面白いかなと思いました。)



C　生活に基づいた文章

短い会話練習だけでなく、少し長めの文章も授業で読んでもらいました。こちらははじめて息子が学校に行った日のことを描いたものです。

Mi primer día de ir a la escuela	学校に行った最初の日
Es un día con viento húmedo de primavera.	湿った春風が吹くある日。
Un niño va a la escuela.	一人の男の子が学校に向かいます。
No quiere ir solo.	彼は一人で行きたくないのです。
Imagina las calles con miedo. Calles estrechas,	恐怖に満ちた街路を想像してみて。狭い道、
el llanto de los cuervos, el puente largo y más.	カラスの鳴き声、長い橋、などなど。
No quiere ir solo. Tiene miedo.	彼は一人で行きたくないのです。怖いのです。
Le pide a mamá que le acompañe.	彼はお母さんに付き添うように頼みます。
Ella le recomienda que no tenga miedo.	彼女は彼に怖がらないよう勧めます。
Te acompaño hasta la puerta de la escuela.	学校の門まであなたに付き添うわ。
Está feliz de caminar con mamá.	彼はお母さんと一緒に歩けて幸せです。
Es un día hermoso.	素晴らしい日です。

¿Qué vemos en la foto?（写真に何が写っていますか？）

En la foto, vemos a un niño listo para su primer día de escuela, acompañado por sus padres. Este evento se llama “Nyūgakushiki”（入学式）en Japón.

También vemos:

・maceta 植木鉢

・orquídeas 蘭

・niño 子供

・traje スーツ

撮影：岡本年正

C　ペルー（と日本）の文化について

ペルーの文化について、時として日本と比較しながら短い文章を作り、学生の皆さんと読みました。ここで紹介するのは最近の授業で使った、ペルーの「ムキ」という妖怪（duende）と日本の「座敷童」を比べた文です。なお、この文章を作成するにあたって、大橋麻里子氏との対話が大変参考になったことを言い添えておきたいと思います。

El Muqui y el Zashiki Warashi

El Muqui y el Zashiki Warashi son seres míticos de diferentes culturas. El Muqui es un duende de la mitología peruana, mientras que Zashiki Warashi es un espíritu en forma de niño de la mitología japonesa. Al Muqui le gusta vivir en las minas de la sierra, mientras que a Zashiki Warashi le gusta jugar en las casas tradicionales. A veces, les gusta recibir comidas tradicionales de sus países de las personas y, a cambio, les gusta regalar suerte. Al Muqui le gusta esconder el oro, pero a Zashiki Warashi le gusta hacer travesuras en las casas. Aunque tienen gustos diferentes, disfrutan tener contacto con los humanos.

Marca la opción correcta de cada pregunta.

1. ¿Qué tipo de ser mítico es el Muqui?
a) Un espíritu en forma de niña.
b) Un duende de la mitología peruana.
c) Un fantasma de la mitología japonesa.

2. ¿Dónde le gusta vivir al Muqui?
a) En las casas tradicionales.
b) En las minas de la sierra.
c) En los bosques.

3. ¿Qué tipo de ser mítico es el Zashiki Warashi?
a) Un duende de la mitología peruana.
b) Un espíritu en forma de niña.
c) Un fantasma de la mitología japonesa.

4. ¿Dónde le gusta jugar al Zashiki Warashi?
a) En las minas de la sierra.
b) En los bosques.
c) En las casas tradicionales.

2-4　教授法を学ぶ

授業を担当し始めて3年がたった2024年9月、私は母校であるクスコ・アンデス大学（Universidad Andina de Cusco）の教育に関する修士課程のオンラインコースの受講を始めました。そして自分自身が教授法を学ぶ過程で、自分は今までどのようなアプローチあるいはメソッドを使ってきたのかを考えるようになりました。これによって授業の目的や教え方のコンセプトをよりはっきりさせ、学びをより体系化することができたと考えています。

こうした教授法の勉強の中で、自分がやってきたことに一番近い、と考えたのが、以下の二つの教育法（ナチュラルアプローチとコミュニカティブ・アプローチ）です。まず、ナチュラルアプローチはクラシェンとテレル（Karshen & Terrell 1983）によって提唱されました。母語を学ぶ子供のように言語にコンスタントに触れること（be exposed）、そして意味のあるコンテクストにおいて練習をすることによって、言語を学ぼうとするアプローチです。これに関連するのが語学学校で有名なベルリッツのメソッド（Berliz 1916）で、こちらも母語を使わずまた文法を教えず、学ぶ対象の言語のみを用い、オーラルなコミュニケーションを行うことで知られます[4]。日本で一般的な文法と訳読重視のやり方とは対照的です。

それに対し、コミュニカティブ・アプローチはリチャーズとロジャースによって提唱された（Richards & Rodgers 1986）、現実的な状況の下でコミュニケーションを十分にとれるようになることを目標とした教え方で、そのために教室でのインターアクションを重視します。またこれに関連して、ウィルキンスが提唱した概念シラバス（Wilkins 1976）のような、従来型の意味・文法の学習（notion）と言葉の機能であるところのコミュニケーション（function）を組み合わせた教授法も考案されました[5]。

2-5　まとめ：自分がやってきた授業を振り返って

今振り返ってみると、私はこれら二つのアプローチの両方を使いなが

ら授業を進めてきたように思います。私は授業中はスペイン語しか話さないので、その意味ではナチュラル・アプローチを実践しています。最初はそのやり方では難しいと感じている学生も、何度も繰り返して日常的な表現を学び、発音し、時には歌をうたったりもするうちに、そうした状況に慣れていきます。

それに加えて、教材については日本語訳をつけ、また日常的な状況を設定したり、ペルーの社会や文化について紹介することで、ペルーという国そのものについて学んでもらうと同時に、スペイン語が実際に使われている場を意識してもらいました。そのようなやり方は、コミュニカティブ・アプローチの一種だと言えるでしょう。

当然のことですが、これらの教育法を学び始めて以来、積極的に授業でも実践しています。その目的は、教室において教員が学生の学習を手伝いやすい、コミュニケーションや学生の参加を促すような雰囲気を作ること、言い換えれば学生が心地よく感じ、学ぼうという意欲を高めるような空間を作り、それによって学習を効果的で学生のニーズに合ったものにするためです。私自身にとって、本稿執筆の過程でさまざまなアプローチを自分自身の経験と関連付けて考えたことは、良い経験となりましたし、また、これらのアプローチやメソッドを大学の授業に応用するのは比較的簡単ではないか、それによって、授業がよりダイナミックで、なおかつ学生にとって受け入れやすいものになる、と考えるに至った次第です。

最後に、学生さんたちから頂いたフィードバックの中から、いくつかをここで紹介します。（紹介する文章については、受講生の方の許可を取っています。）

・大好きな授業です！言語や文化いろんな面白いことを教えてくれてありがとうございました！次の授業はちょっと生活的な会話を聞きたいです、例えば買い物する時何を言いますっていう話し。Muchas gracias por todo!

・歌詞の聞き取りは難しかった．tenerは簡単だった．一人ずつ作文するのも良いが，口頭で答えるのもやりたい．
・Muchas gracias por la clase de 3Q.（渡辺注：第3クオーターのこと）
La clase es muy divertida. Hablar en español con los compañeros es interesante. Saber la cultura de Peru es tambien.
スペイン語初級の授業で学んだ文法・表現をセミナーで試したり、セミナーで知った文化の話が授業で出てきたり、2つのクラスを通してスペイン語により深く触れることができました。3Qでは、クラスメイト同士での会話文練習や短い作文などを行い、より実践的な形でスペイン語を使えるようになってきたと実感しています。また、佐々木先生の単語シートによって汎用の表現を学んだり、田坂先生のプリントで時間の表現を復習したり、大変勉強になりました（渡辺注：佐々木先生・田坂先生は当時中・上級のクラスを担当して下さっていた先生方）。ペルーの文化についても、ケーナの音楽や古くからある図書館の映像などが、とても興味深かったです。特に、みんなで“Yo soy huancaino”を歌ったのが楽しかったです。
・スペイン語初級をとっておらず初めて触れたが、スペイン語の単語が英語と似ているものが多くて面白い。スペイン語初心者の私でも置いてかれなくて、わかっているか確認してくれてありがたいです。¡La profesora es muy amable!
・前半は文法の時間で、後半は会話の時間になっていて、良いと思った。スペイン語と日本語の説明が書いてあって、分かりやすかった。スピードは少し早いと感じた。ジャケリン先生の口頭の説明が、前よりも聞き取れるようになったと感じた。初級の授業をとっている人には復習の内容だったが、初学者には難しい内容だと感じた。
・楽しかったし、勉強になりました！初学者の僕でもついていけたので良かったです。時間が丁度良く、難易度も適切だったと思います。
・型に当てはめることは出来たが、言い方が分からないと何も書けず、単語や文法を知っている・知っていないの差は大きいなと感じた。

・Era un poco difícil hacer ejemplos en tiempo limitado, pero fue divertido.
たくさんスペイン語が聞けて良かったです。発音も聞き取りやすく、日本語を目で追えば意味も分かるので、とてもいいと思います！あとは僕の語彙力が上がれば、、、
・Es interesante que la procesión de la virgen recorra las casas. Es divertido hacer oraciones usando las palabras que nos das.
・¡Disfruté practicar vocablario! Quiero aprender pretérito manaña o pasado mañana. ¡Gracias!
たくさんスペイン語が聞けて良かったです。発音も聞き取りやすく、日本語を目で追えば意味も分かるので、とてもいいと思います！あとは僕の語彙力が上がれば。
・このレッスンはとても勉強しやすい雰囲気で、満足しています！本授業のおかげで、話す自信がつきはじめ、自分のスペイン語能力も向上しました。4qを楽しみにしています！
¡Muchas gracias por esta clase!

（渡辺注：以下は2025年の年明け最初の授業へのコメントならびに最終回の授業で取り上げた、再帰動詞を用いた毎日の生活（la rutina）についての学生さんの作文です。）

・¡Feliz Año Nuevo 2025! Me gustaría viajar Perú, España, y Chile en el futuro. ¡Muchas gracias por hoy!
・¡Feliz Año Nuevo! ¡Gracias por esta clase! Hoy he aprendido la conjugación del pospretérito y lo voy a practicar mucho esta semana.
・¡Feliz Año Nuevo 2025! 2025年あけましておめでとうございます。
Me gustaría viajar a Francia. 直説法過去未来について理解を深められてとてもよかった。

Mi rutina

Todos los días me levanto a las siete y media de la mañana. Me lavo la cara, me visto y preparo desayuno. Después de desayunarme（*sic**）, me maquillo y me peino. Luego veo un poco las noticias en *YouTube* y finalmente, a las nueve salgo de casa y voy a la universidad a pie.

（渡辺注：* の部分は本来は desayunar というべきですが、再帰動詞を学ぶ中で desayunarme としてしまうのは学習の過程においてかえって論理的な間違え方に思えます。）

3　中級・上級・文化演習の授業（渡辺）

3-1　文法知識を講読や聞き取りを通して定着させる

本節では渡辺が担当してきた中級、上級、そして大学院の文化演習の授業について振り返る。これらの授業で目標としていることは、講読や聞き取りなどのスペイン語の実践を通して、初級で学んだ文法事項（二つの過去形のちがいや接続法の用法など）の理解を深めることである。

最初の2年半はZOOMを通じての授業であったが、その頃の授業でのZOOMならではの工夫と、直近の2024年度に行っている授業での講読実践の中から、紹介するに値すると思われる工夫について述べていく。最後には「備忘録」として、実はまだこの中上級の授業では使っていないが、本稿を書いていて思いついた、今後使えそうな教案についても紹介したい。

3-2　ZOOM時代のガルシア＝マルケス

すでに別のところでも書いているが（渡辺2021）、東工大の第二外国語としてのスペイン語科目が立ち上がったのは2020年4月であった。着任直前に始まったコロナ禍により、スペイン語の授業は最初の2年間、全てZOOMで行われた。

最初の年の大学院生向けの文化演習の授業は、筆者にとって忘れられないものになった。これについては前述の論考で紹介しているので、ま

ずはそちらをそのまま引用する（渡辺 2021: 85–86）。

> この（2020年度の）大学院生向けの授業では、文法を全部で10回程度の授業で復習したあと、スペイン語の文章を読む、という試みを始めた。最初は私自身が翻訳をして、学生さんに疑問点を聞いてもらうというやり方をしていたが、途中から、これもまたZoomという環境を生かして、学生さんたちにグループワークで訳を考えてもらう、というやり方に切り替えた。この間、教員は何をしているかというと、議論が別の方向にずれている時だけ、チャットあるいは並行して立ち上げているLINEで、助け舟というかヒントを出すのである。
>
> これは、我ながら非常にいいアイディアだったと思っている。学生さんたちが自分たちで調べながら読み進めてくれるのを見ていて、しかも発言を声ではなくLINEかチャットで流すことで、文字情報が残り、また学生のペースを乱さないので、彼らにとって、教員から介入されているという感覚もあまりない。もちろん、クラスのサイズが小さく、また学生さんが皆優秀な人たちだったからこそ、成立するやり方ではあるのだろうが、オンラインの良さを上手く生かした方法であったと思う。（なお、授業前半に流したチャットの内容は、「ここの単語の取り方が違うよ」とか、「文法の解釈がそれでいいのかな？」というものであったが、それがだんだん、「近い」「おしい」「ちょっと違う」になり、最後には「そうそう」くらいしか書くことがなくなっていった過程は、本当に心地よいものであった。）

こちらに少し、当時のより具体的な状況を書き足しておきたい。実はこの授業は第2クオーターから、前年のイタリア留学から帰ってきた修士3年の井手亮我さんが加わってくれたことで、劇的な変化を遂げた。この方が授業中も積極的に発言して下さったことで、授業に対話がもた

らされ、また他の学生さんも発言しやすい環境が作られ、まさに「ポリフォニー」が生まれたのである。

また、後半の授業で実際に読んだ作品は、ガルシア＝マルケスの「ラ・サンタ」という作品だったが（なお、本作品の舞台はイタリアのローマである）[6]、かなり難解なこの作品を、彼らが読み進めていくのを見る（聞く）のは、本当に心強いものだった。当初は5名ほどの学生さんがいたが、皆さん専門のご研究で忙しいこともあり、最後まで完走されたのは3名であった。イタリア語の知識も交えて積極的に取り組んでくれた井手さん、毎回予習を欠かさず、独学とは思えないスペイン語力をお持ちだった小西諒さん、そして本来は学部の中級の受講生だったが、このグループに加わってくれた鈴木海堂さんに、深くお礼を申し上げたい[7]。

3-3 『アフリカのキリン』

本項では2024年度第4クオーターに主たる教材として取り上げている文学作品と、それをどのように活用しているかをご紹介したい。

筆者は大学1年生の時、実はフランス語を第二外国語として選択していた。その時受講していたのが、ジョン・ケージの音楽とマルセル・デュシャンの芸術活動がご専門の岩佐鉄男先生の授業である（土曜1限に開講されていた）。その後岩佐先生とは、中南米科の研究室がたまたま表象文化論の研究室の隣だったことから、中南米科の教務補佐員をしていた時代に大変お世話になったのだが、当時の私は本当にできの悪い学生であった。教務補佐の仕事を離れたあと何かの機会にごあいさつのメールをお送りしたところ、奥様が書いた本がスペイン語に訳されてメキシコで出版されているのでよかったら、と教えて頂いた。それがここで紹介する *Jirafa Africana*（Iwasa 2011）である。実際にメキシコの本屋で手に取ってみたところ、とても面白く読みやすかったので、その後何度か教材で使わせて頂いている[8]。

日本語の原著のタイトルは『ぼくはアフリカにすむキリンといいます』で、これは主人公のキリンがまだ見ぬともだちにあてた手紙の書き出し

である（蛇足だが、本項のタイトル『アフリカのキリン』はスペイン語訳のバック・トランスレーションである）。この手紙を偶然受け取ったペンギンとキリンとの文通がはじまり、その過程の中で、手紙をはこんでくれるペリカンとアザラシ、そしてペンギンの師匠のクジラ先生（教え子の私の勝手な想像だが、なんとなく鉄男先生をイメージしてしまう）のあいだの不思議な交流が大変楽しい児童文学作品である[9]。

語学の講読の授業というと、どうしてもその言語で書かれた文学作品を読むことが主流となり、もちろんそれはそれで大変重要なことではあるが、こうした翻訳作品を読むことも非常に意義深いことだと考えている。なぜなら、単語が比較的平易で学生にも読みやすく、それでいて様々な文法事項の学び直しには非常に有効だから、である。以下は本書の書き出しの部分の抜粋である。

A modo de introducción

Hola, ¿cómo estás? ¿Tienes buenos amigos? ¿A veces te sientes solo? ¿Andas siempre ocupado con muchos asuntos? ¿Te aburres porque no tienes nada qué hacer? Voy a presentarte a una jirafa. Una jirafa que me *pidió* que *escribiera* su historia. Al parecer desea que la *lean* las personas que se sienten solas y las que se aburren. Y que la *lean* también, para tomarse un respiro, esas personas que siempre andan muy ocupadas（p.7）.

La jirafa aburrida escribe su primera carta

（前略）

¿Acaso no parecía tener una vida ideal? Sí, *parecería* que la jirafa no tenía nada de qué quejarse；pero había algo que ella deseaba con todas sus fuerzas: un buen amigo, porque la jirafa no tenía ningún amigo que la *comprendiera* y por eso se aburría tanto y estaba a punto de terminar un día más, otro aburrido día más（p.9）.

下線を引いたのは動詞が使われている部分である。前半のはしがきは読者のメッセージなので基本的に現在形で、後半の書き出しの部分は基本的に線過去形（「過去における現在形」とも言われる）で書かれているが、イタリックになっているところは直説法現在形以外の時制や法（直説法ではなく接続法）が使われている部分である。

授業ではこうした時制がどのような意味で使われているのかを丁寧に説明する。それによって、一度教科書で一通りは学んでいるはずのそれぞれの時制が、実際の文章の中でどのように使われているのかがよく理解できるのである。また、動詞本体の前にteやseなどの代名詞がついていて、その部分にも下線が引かれているのは全て再帰動詞だが、こちらについてもこれだけ多くの用例があること、そしてそれらの動詞がどのような用法で使われているかを理解することは、一度教科書で学んだだけではなかなか難しい。こうした形で改めて学ぶことで、彼らの理解、そして願わくば実践能力が伸びるのではないかと考える次第である。

2024年度の後期の授業は、大学院生4名、学部生1名、留学生1名の6名でスタートしたが、その後第4クオーターに入り、選択必修の教養科目とのバッティングなどでやめてしまった学生さんもいて、12月末現在で3名の学生さんが受講を続けてくれている。忙しい皆さんに予習をお願いするのは難しく、また予習をした人としない人の間で差ができてしまい、授業がしにくくなるので、授業の前半で少し自分で意味を調べてもらい、後半で音読しながら訳読してもらった上で教員からも内容を説明する、という形を取っているが、上記のように動詞の活用形の意味については特に丁寧に扱っており、彼らが納得するまでしっかり説明し、そうした理解が定着するように、彼ら自身にも自分の言葉での説明をお願いしている[10]。

3-4　本節のまとめと備忘録

第3節では渡辺の授業実践の事例を扱ってきた。まとめといってもあまり付け加えることはなく、訳読などの実践を通して文法で習ったこと

の理解を深め、さらなる実践に役立ててもらう、ということであるが、ZOOMでの授業の様子や教材の紹介などが少しでも役に立てばと考えている。なお、今年度の前学期の授業では、動画を用いた聞き取りなども試みた。用いた素材は以前にも紹介したことのある（渡辺　2017：30）、2015年のスペイン国王杯におけるメッシのゴールシーンの実況だが、何度も繰り返し見せているうちにパソコンの動作がおかしくなり、動画再生が機械にかける負担が決して軽いものではないということを学んだ次第である。

以下、必ずしも東工大＝科学大の中上級の授業で使ったものではないが、最近の授業での工夫について、2つご紹介しておきたい。（いずれも2024年度秋学期最終回の慶應義塾大学での授業で扱った「ネタ」である。）

一つは接続法を説明するための工夫である。スペイン語の接続法は英語の仮定法と同じものだが（元々の用語はどちらもsubjunctiveで、訳語が違うだけである）、英語で仮定法として高校で学ぶのは、厳密に言えば仮定法過去というべき形で、スペイン語の接続法現在を学んだときに、それと同じものだ、と説明するには少々無理がある（接続法過去の登場を待たなければならない）。

それに対し、英語でスペイン語の接続法現在にあたるのは仮定法現在だが、現在の英語ではほとんど使われない。（そのためか、多くの学生が、「If I couldは仮定法現在ですか？それとも仮定法過去ですか？」と聞くと、「現在のことを指しているから前者だ」と答える。）筆者はこれまで、イギリス国歌のGod Save the Queen/Kingを仮定法現在の例として使ってきたが、最近それよりずっといい例を見つけた。それがくしゃみをしたときなどに使うBless you!である。こちらであれば多くの学生が一度は聞いたことがあり、説明が容易なのに加え、実はこれが実は仮定法現在という珍しい動詞の「形」なのだ、ということを知ることは、彼らの英語の理解のためにもよい効果があると考えられる。

もう一つは、映画『瞳の奥の秘密（原題：*El Secreto de Sus Ojos*）』に出

てくるセリフである。25年前の殺人事件の顛末を追い続ける元捜査官の主人公（エスポシト）は、田舎に引っ込んで暮らす被害者の夫（モラレス）と再会して事件について話をする。その中でエスポシトは以下のようにつぶやき、（他にもやりとりがあったあとに）モラレスは「それ以上は考えるな」と彼にさとす。

Espósito: Pensé… Pienso…
（中略）
Morales: No piense más.

最初のセリフは英語に直訳すれば、I thought, I（still）think. となるだろう。日本語字幕では、全く別の訳し方（「もしかしたら」「たぶんそうだ」）をされていて、これは大変うまい訳だと思うが[11]、スペイン語を学んでいる皆さんには、pensar という動詞、そしてそれを点過去形と現在形でいうことで、時としてそのような意味を表現できることを、そして話し相手が同じ動詞をそのまま使って否定命令形で返答するところなど、スペイン語という言語を学ぶにあたってとても面白い例ではないかと思った次第である。

もちろんこうした例はおそらくどこにでも転がっているだろうが、いいタイミングでそれに巡り会えるか、というとなかなかそうはいかない。だからこそ、常にそうした「ネタ」を探し、そして授業で使えるように加工していくことは、学生の興味を引く面白い授業を展開するにあたって、やはり大事なことなのではないか、とあらためて考えた次第である。

4　むすび

本稿ではここまで、東工大スペイン語の選択科目において行ってきた試みについて、オカモトが担当した会話の授業と、渡辺が担当した中上級の授業の例をもとに紹介してきた。いずれの授業でもさまざまな工夫

がなされており、語学教員の方々にとって参考にして頂けるのではないか、と考えている。（私自身、オカモトのさまざまな工夫をどのように自分のこれからの授業で生かすか、と考えながら、第2節の翻訳・執筆の作業を行った。）本稿に書いた試みのうちの何かが、どこかの教室に届くことを願うとともに、さらにこうした「ネタ」を見つけ、授業で使うための努力を続けていこうと考える次第である。

最後に少し、これらの選択授業の受講生が残念ながらそれほど多くない理由について、触れておきたい。本学では専門科目が「月・木」「火・金」の週二回のペースで組まれており、水曜日は時間割の谷間となっている。水曜午後は他の授業が入っていないため、多くのサークルの活動日となっているのに加え、学生からするとここに授業を入れなければ、忙しい学生生活の中で少し時間に余裕ができる、という時間帯でもある。また、大学院の選択必修科目である文系教養科目や、場合によっては研究室の読書会、そして研究室での安全のための必修授業なども、この時間帯に入ることがあるそうである。以上のことは、受講生の皆さん（あるいは取ってくれるかな、と思っていたが、以上のような理由で受講できなかったという学生さん）に聞いたので、学生目線の意見だといって差し支えないと思われる。

逆に言えば、現在授業を取って下さっている学生さんたちは、そうした時間をスペイン語の学習や、授業に参加する楽しみのためにあててくれている大変熱心な皆さん、ということになる。大学によっては少人数の授業の最小開講人数が決められているところも多いと聞く。科学大においては、そうした熱心な皆さんの学びの場が今後も存続することを願っているが、そのために教員ができることは、これからも工夫を続け、よい授業を学生に提供していくこと、ということになるだろう。本稿はそんな決意表明も兼ねている。

注

1　これまでにスペイン語の選択授業を担当したのはオカモトと渡辺だ

けではないが、今回は便宜上この二人の授業を紹介することを、これまで授業をご担当下さった他の先生方への敬意とお詫びとともに記しておきたい。

2　文化演習という授業は基本的にスペイン語上級の授業と同時に開講される。筆者自身は、別の科目として（そして大学院生向けの選択必修の教養科目の一つとして）開講するべきではないかと考えているが、予算の関係もあり、別立てで開講することは難しい状況である。

3　オカモトの担当する部分については、まず、オカモトが会話の授業についての振り返りを母語であるスペイン語で執筆し、その原稿を渡辺が読んで構成を多少変更しながら本文を日本語で改めて書き、それをオカモトの夫で自身もスペイン語教員の岡本年正氏の助けを得ながらご本人に確認してもらう、というプロセスで執筆された。この場を借りて年正氏にお礼を申し上げます。

4　ただし、このベルリッツのメソッドについては、ベルリッツ自身が「発明」したというより、もともと存在したものではないかとの批判もある（Singer 2021）。なお、この記事の中で筆者（渡辺）が最も衝撃を受けたのは、ベルリッツが普通教育に反対していた、との事実であった。当時の社会階層を反映した者だと考えられるが、1970年代以降にコミュニカティブ・アプローチが脚光を浴びた背景にも、ヨーロッパにおける移民の増加があったとの指摘もあり（閻 2019：1–2）、こうした社会的な背景も言語教育の中での流行に影響を与えていることは今後の教育法の研究をする際に、無視できない要因の一つと言えるだろう。

5　なお、ここで言う「シラバス」はウィルキンスの教授法を研究した古家の解説を引用すると、「カリキュラムの構成原理」あるいは「教授内容を細目化したものであり、教授・学習を効果的なものにするために内容がある程度まで選択、配列」されたものである（古家 2019：267）。

6　「聖女」のタイトルで、旦敬介と野谷文昭の訳で読むことができる（ガルシア・マルケス 2008, 2022）。この短編についての筆者なりの分析、それをどのように授業で使ってきたかについては、筆者の別の論考も参照されたい（渡辺 2012b, Watanabe 2014）。

7　読解は順調に進んでいたが、いよいよクライマックスとなったときに、井手さんの研究室が打ち上げた人工衛星からの交信が一時途絶えていたのが復活し、井手さんが忙しくなってしまったため、結末部分は読み終えられていない。いつか同じメンバーで続きを読む機会があることを、秘かに願っている。なお、この授業の参加者の皆さんには、当時収録した東工大ILAのオンライン講座「チェスは世界をつなぐ」にもご出演頂いた（https://educ.titech.ac.jp/ila/news/2021_10/061366.html: 彼らが出てくれたのは第3章）。また、彼ら3名はコロナによる規制が少し和らいだ21年3月に、井手さんの卒業旅行で筆者が住む甲府に遊びに来てくれた。そんなこともあって、筆者の教員としてのキャリアの中でも忘れがたい授業となっている。

8　本書は2018年にドイツ児童文学賞を受賞している（偕成社ウェブマガジン 2018）。

9　また、本書の翻訳を刊行したメキシコの出版社は、元は政府系の学術出版社だが、外国の絵本や児童文学の翻訳にも力を入れていて、日本の作家では五味太郎さんの作品などが多く出版されている。筆者は同社から出ている別の絵本（*Camino a casa*）も授業で使ったことがあるが、それについては、渡辺（2012：115–116）で紹介しているので、よかったらご参照されたい。なおこの絵本はその後日本語にも翻訳されている（ブイトラゴ 2018）。

10　現在も受講してくれている方のバックグラウンドはそれぞれである。メキシコに以前住んでいたことがあり、ある程度会話もできる力を持っていてさらにスペイン語能力を伸ばそうとしている修士1年の吉田紗良さん。学部2年生の頃からスペイン語を受講し、学部3

年間そして修士に進学してからも、毎年受講してくれている髙橋泰星さん。昨年とても熱心に授業に参加し、3年になってもスペイン語の勉強を続けてくれている山岸優和さん。専門の研究でお忙しい中受講を続け、毎回着実な成長を見せて下さる皆さんに、厚くお礼申し上げます。

11　この映画の別の箇所の字幕についても以前書いたことがあるので、ご関心がある方は参照して頂きたい（渡辺 2017：30）。

参考文献

Berlitz, M. D. 1916. *The Berlitz Method for Teaching Modern Languages*. New York: Berlitz Publishing Company.

Iwasa, Megumi. 2011. *Jirafa Africana*. México: Fondo de Cultura Económica.

Krashen, S. D. & Terrell, T. D. 1983. *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. Hayward, Calif.: Alemany Press Alemany Press.

Richards, J. C. & Rodgers, T. S. 2001. *Approaches and Methods in Language Teaching*. Cambridge University Press.

Saltmarsh, John. 1996. “Education for Critical Citizenship: John Dewey’s Contribution to the Pedagogy of Community Service Learning,” *Michigan Journal of Community Service Learning*, Volume 3, Issue 1, 13–21（Permalink: http://hdl.handle.net/2027/spo.3239521.0003.102）.

Singer, Saul Jay. 2021. “The Secret Judaism Of Max Berlitz And The Berlitz International Myth.” JewishPress.com, March 17（https://www.jewishpress.com/sections/features/features-on-jewish-world/the-secret-judaism-of-max-berlitz-and-the-berlitz-international-myth/2021/03/17/, 2024年12月27日参照）.

Watanabe, Akira. 2014. “Throw away the Textbook and Get a Paperback Instead: Reading García Márquez Short Stories and Sandra Cisneros’s *La casa en Mango Street* in Spanish with Limited Vocabulary and

Grammatical Knowledge," *The Journal of Literature in Language Teaching*, Vol. 3, Issue 1, 8–19.
Wilkins, D. A. 1976. *Notional Syllabuses: A Taxonomy and Its Relevance to Foreign Language Curriculum Development*. Oxford: Oxford University Press.
岩佐めぐみ 2001『ぼくはアフリカにすむキリンといいます』偕成社。
閻慧 2019「コミュニカティブ・アプローチの特質」『比較日本文化学研究』第12号、1–12。
大橋麻里子他 2023『ミカサ・トゥカサ――よくわかるスペイン語文法への招待』朝日出版社。
偕成社ウェブマガジン 2018「ドイツ児童文学賞を受賞！岩佐めぐみ作『ぼくはアフリカにすむキリンといいます』」(https://kaiseiweb.kaiseisha.co.jp/s/osusume/osm181105/, 2024年12月27日参照)。
ガルシア＝マルケス ガブリエル 2008『予告された殺人の記録／十二の遍歴の物語』新潮社。
――――― 2022『ガルシア＝マルケス中短篇傑作選』河出書房新社(野谷文昭編訳)。
ブイトラゴ、ハイロ 2018『いっしょにかえろう』岩崎書店(ラファエル・ジョクテング(絵)、宇野和美訳)。
古家貴雄 2017「Notional Syllabus 再考――これまでの英語教育の流れの中で――」『山梨大学教育学部紀要』26、267–276。
渡辺 暁 2012a「地域研究者として教える第二外国語――ラテンアメリカ研究とスペイン語教育のあいだ――」『青山スタンダード論集』7、107–122。
――――― 2012b「『十二の遍歴の奇譚集』にこめられた三つのオマージュ――ガルシア＝マルケスと映画・政治・詩作――」『東京医科歯科大学教養部研究紀要』42、13–36。
――――― 2017「教養教育としての第二外国語教育――東京大学2015年度秋学期(Aセメスター)の授業の記録から――」『高等教育と国際

化――山梨大学教育国際化推進機構紀要年報』3、28–32。
――――― 2021「コロナの時代の語学教育――東工大スペイン語の科目立ち上げとオンライン合同授業の記録――」『ポリフォニア』13、73–90。
――――― 2025「シン・語学教育宣言――日本の大学における教養としての第二外国語教育についての覚え書き――」『ポリフォニア』17、165–188。